



国際化の最前線から



地域で学ぶ、地域と学ぶ

～フィールド教育の新たな挑戦 ②

立命館大学先端総合学術研究科 准教授・(一社)北の風・南の雲 理事 阿部 朋恒

前号のコラムでは、教える立場から降りること、予測不可能性を許容することを要諦として、フィールド教育の新たな構想をお示ししました。今回は、その実現に向けた具体的な取り組みをご紹介します。

(一社)北の風・南の雲では、毎年モンゴル国や中国雲南省でのフィールドスタディ・プログラムを実施しています。2024年は、法人が拠点を置く兵庫県宍粟市の小中学生9人と一緒に雲南の山村を訪れました。「あるもの探し」と銘打って、興味を惹かれたもの・ことを自由に追求するよう背中を押してあげる。たったそれだけで、

棚田で鯉を手づかみしたり、市場で調達した鶏を捌いてお世話になった人たちに「日本料理」をふるまったりと、子どもたちの行動力がいかに



中国雲南省にて棚田の畔を分け入っていく兵庫県宍粟市の子どもたち

なく発揮された1週間になりました。帰国後の成果報告会では、テーブルマナーや食材、昆虫の形態、人の名前の付け方など1人ずつまったく異なる着眼点からフィールド経験を咀嚼していることが分かり、さらに驚かされました。

このプログラムでは、法人代表理事を務める大阪大学グローバルイニシアティブ機構の思沁夫さん、子どもたちのお母さん2人、宍粟市出身で若手社会人のお兄さんと私が引率しましたが、5人のうち誰も小中学校の教員免許は持っていません。私も「阿部先生」ではなく「あべさん」として、最低限度の危険から守ることと、現地の人とのコミュニケーションを手伝うことくらいしかしていません。それでも子どもたちの発想力が開花したことに鑑みると、大人が出しゃばらず黒子に徹していれば、子どもたちは現地のを眺め、現地の人に聞き、そし

て自分の頭で考えるのだと思います。

報告会には、雲南大学で少数民族の研究をされている先生方をお招きしました。それぞれ型に嵌らない個性的な発表を聞いて「ノーベル賞受賞者の数では、次の世代も日本には勝てないかもしれない」と評されており、私も頼もしさを覚えました。このことが縁になって、今後は雲南大学のフィールドスタディを私たちで受け入れることになっています。宍粟市の子どもたちが今度は「現地の人」になって、雲南からやってくる学生を案内する。その姿を見る日が楽しみです。



(一社)北の風・南の雲法人事務所にて「フィールド教育協力基地」の看板を掲げる法人代表の思沁夫さんと雲南大学民族学与社会学学院長の何明さん

プロフィール

阿部 朋恒 (あべ ともひさ)

首都大学東京大学院人文科学研究科社会人類学教室 博士後期課程修了。博士 (社会人類学)。研究地域は中国雲南省、チベット文化圏など。

現在は、京都の山間集落に移住し、住人としてその地域に関わりながら「地域で学ぶ・地域と学ぶ」フィールド教育を実践中。

共著書に「世界遺産を支える『文化』の諸相——中国雲南省における『紅河ハニ棚田群の文化的景観』の世界遺産登録をめぐる」、飯田卓編『文化遺産と生きる』(臨川書店) などがある。